

肺気腫患者の VRS 手術前後に示す反応 —リハビリ, 活動, 手術に焦点を当てて—

加藤晶子 弓場茂子 藤井玲子 立神聡子
竹升美紀 高祖奈穂 林 優子¹⁾

要 約

今まで内科的治療が主体であった肺気腫に対して, 近年外科的治療 (Volume Reduction Surgery 以後 VRS と略す) が行われるようになった。VRS を受ける患者の看護では, 手術前後において, リハビリテーション (以後リハビリと略す) や機能回復に向けてのケアが必要不可欠とされる。そこで, 本研究は肺気腫患者の適切な看護援助を検討するために, 手術前後に示す肺気腫患者のリハビリや活動に対する反応を明らかにすることを目的とした。

対象者は当病棟に入院している肺気腫患者 8 名 (VRS 手術前 8 名, 手術後はそのうちの 6 名である) で, リハビリ, 日常生活活動, 呼吸, 手術などについて, 面接ならびに観察による調査を行った。分析の結果, 手術前においてリハビリでは《義務感》, 頑張れば呼吸が楽になるという《期待感》, 《サポート》, 《不安》が, 活動では《活動の制限》, 手術では呼吸が楽になるのではという《期待感》, 《おまかせ》, 《いちかばちかの賭け》, 《不安》, 《回復に向けての欲求の高まり》が明らかになった。手術後においてリハビリでは《呼吸が楽になるための手段》が, 日常生活活動では《今の状態よりは良くなるという期待感》が, 手術では《達成感》と《身体的苦痛》が, 将来については《ささやかな欲求》が明らかになった。

キーワード: 肺気腫患者, VRS, 手術前後の患者の反応

はじめに

今まで内科的治療が主体であった肺気腫に対して, 近年外科的治療 (Volume Reduction Surgery 以後 VRS と略す) が行われるようになった。一般に, 肺の外科的治療は身体に侵襲を与え, 機能を喪失または低下させるのに対して, VRS は機能の回復を目的としているという点で大きく異なっている。したがって, 肺気腫は従来行われてきた内科的治療で自己コントロールが可能な疾患であるにもかかわらず, 患者は慢性的に苦しんできた呼吸機能障害からの解放を願って, 自ら手術を切望して入院してくる。

この手術では, 肺機能回復のためのリハビリテーション (以後リハビリと略す) が手術前から手術後にかけて必要不可欠である。また, 順調な機能回復を目指すためには, 患者が積極的にリハビリに取り組むことが重要になる。VRS におけるリハビリは, 気道の清浄化と呼吸能力の改善といった直接的効果のほか, 長期間の呼吸機能障害によって生じたさまざまな廃用症候群の改善や, 身体的および精神的なリラクゼーションも目的とし, これによって, 日常生活活動の能力改善や, 術後の回復能力を高めることが期待されている¹⁾。

そのため, 患者は理学療法室で行うリハビリに

岡山大学医学部附属病院

1) 岡山大学医療技術短期大学部看護学科

は積極的であった。しかし、病棟内でADLを拡大させていくことには無関心であるように思われ、それに対してどのように看護すればよいのか戸惑うことが多かった。肺気腫患者に関する先行研究では、内科的治療を受けている患者を対象にしたセルフケアの確立に関するものや、酸素吸入中の看護など^{2,3)}が主であり、VRSのような外科的治療を受ける患者の看護に関する研究は我が国では皆無であった。

そこで本研究は、今後増加していくと思われるVRSを受ける肺気腫患者に対して、適切な看護援助を検討していく手がかりを見出すために、患者がVRSに欠かせない手術前後のリハビリや、日常生活上の活動に対してどのような反応を示しているかを明らかにすることを目的とした。

研究の対象と方法

1. 研究対象

対象者は当病棟に入院している肺気腫患者8名である。VRS手術前は8名であったが、手術後はそのうちの6名であった。

2. 研究方法

1) 研究期間

平成8年8月12日～平成9年5月末日

2) データ収集

データ収集は、患者がリハビリや日常生活上の行動に対してどのような反応を示しているかを明らかにするために、面接ならびに観察による調査を行った。

面接では、手術前と後に1回づつ看護婦2名がインタビューを行い会話をカセットテープに録音した。録音は患者の承諾を得てから行った。イン

タビューをする時期は手術前1週間以内と、手術後2～3週間の時期とした。インタビューの内容は、手術前では、日常生活(入浴、歯磨、食事、衣服の着脱、排泄等)について、外出について、どんな気持ちで生活していたか、リハビリに対する取り組みかた、看護婦に介助して欲しいこと、手術するにあたって心配なことの6項目である。手術後では、手術前の質問項目に今後の生活で心配なこと、手術前と変わったこと(呼吸や生活面で楽になったかどうかなど)を含めた8項目である。

観察では、入浴、歯磨、食事、衣服の着脱、排泄等の病棟における日常生活行動を観察した。

また、診察記録と看護記録より患者の一般的な情報として肺機能、酸素療法の有無およびその期間、年齢等を収集した。

3) 分析方法

分析はリハビリ、活動、手術および将来についての項目ごとに、観察で得られたデータを加味しながら、共同研究者を含めた7名で行った。その方法は、録音した面接内容を逐語記録し、それらのデータから類似した内容をまとめて分類し、分類したカテゴリーに適切な名称をつけた。

結 果

1. 対象者の背景

対象者の背景は表1に示すように男性7名、女性1名であり、年齢56歳から75歳であった。術前の酸素療法は4名が行っていなかった。労作時の呼吸困難感是最も長い人で12年間続いていた。

2. 肺気腫患者の反応

肺気腫患者の反応の分析結果は、表2、表3に示すとおりである。

表1 対象者の背景

対象	年齢	性別	家族構成	職業	術前の酸素療法の有無	労作時呼吸困難期間	面接
1	66	F	2人	無職	夜間のみ2ℓ/分	4年	手術前後
2	75	M	2人	無職	なし	半年	手術前後
3	65	M	2人	無職	なし	4年	手術前後
4	56	M	6人	無職	24時間2ℓ/分	7年	手術前
5	68	M	4人	農業	なし	12年	手術前後
6	58	M	5人	無職	24時間1.5ℓ/分	2年半	手術前
7	55	M	2人	農業	なし	3年	手術前後
8	69	M	2人	会社員	24時間0.5～2ℓ/分	7年	手術前後

表2 手術前の患者の反応の内容分析の結果

反応の分類		対象者の述べた言葉
リハビリについて	義務感 期待感	<ul style="list-style-type: none"> ・リハビリは嫌じゃねえです ・ご飯を取りに出るのもリハビリだと思ふ ・リハビリをして体力を付けないといけない、足もしっかりしないといけない、人に負けたらいけない ・手術に向けて楽に行くんじゃないかな ・これが仕事じゃと思っでやっていた ・やれと言われるからしている
	サポート	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなが親切してくれたから ・連れ（同じ病気の患者）がおるから、メンバーがおるから（リハビリが出来た） ・やれるだけやってみてどうしても駄目ならね、おやし帰って来たらしいじゃあないかと、息子も言うしねえ
	不安	<ul style="list-style-type: none"> ・私みたいに酸素をどんどんしている者が大丈夫かなあという、そういうのはあったけどね
活動について	活動の制限	<ul style="list-style-type: none"> ・車でなら温泉にでも行けるが、坂道が駄目 ・自分が思うようには歩けない、上へ（坂道を上ること）がとにかく悪い、5m歩いたら、ハフハフ言う ・2階に上がるのが気持ちしんどくなって ・外出する事はまずなかった、だんだん行かなくなった ・どうしてもえらい時は、したい事をやめるといったふうにな ・苦しいと思ったら5分休んでまた歩く ・畑仕事に鍬は使えないから、手鍬の小さいのを使うんです ・一日ベットで何もしない ・入院までは自分でなんでもポツポツとしていた ・頭を洗う時時間をかけるとしんどくなるので、簡単な方法です
手術について	期待感	<ul style="list-style-type: none"> ・私達の病気ゆうたら苦しい、苦しいゆうたらどうしようもない苦しきよ ・こんな治療をしてくれるところがあると思っで ・このまましんどいだけで死んでいくのはいけないと思っだ ・それなりに苦しんできたから手術となるとその気になりますね
	おまかせ	<ul style="list-style-type: none"> ・伊達先生に任せてもう何も言う事はないです ・（手術後は）70～80%は良くなると言われてその言葉を信じてしてもらおうじゃ
	いちかばちかの賭け	<ul style="list-style-type: none"> ・手術が失敗して死んでもええ、手術をしてもらえのなら（その後患者は泣いてしまう） ・結果が思わしくなくてもそれは宿命です
	不安	<ul style="list-style-type: none"> ・心配はない、任して、任さないしょうがない、本当言うて恐い ・一日一日迫って来ると不安ではなくてねえ、でも手術となるとどんなんかなあ…
	回復に向けての欲求の高まり	<ul style="list-style-type: none"> ・「今年の冬はよう越すんかなあ」とそうゆう感じだったけどねえ ・自分でよう動けんようになったら困るなあとそれだけ心配で… ・金はないけどこのえらさには変えられないと思っで ・人に馬鹿にされたというのがひとつ辛かった ・皆と（健常者）同じように出来なくて歯がゆく思ふ ・カートに乗りながらでももう一度だけゴルフがしたい

1) 手術前

(1) リハビリについて

患者はリハビリを、手術をするためにしないと
いけないものという《義務感》と、頑張っで行え
ば呼吸が楽になるという《期待感》を持って取り

組んでいた。同じ病気でリハビリを頑張っている
仲間や、家族の《サポート》があることで、リハ
ビリを続けることができていた。また、労作時の
呼吸困難感を抱えながらリハビリを行うことへの
《不安》を持っている人もいた。

表3 手術後の患者の反応の内容分析

反応の分類		対象者の述べた言葉
リハビリについて	呼吸が楽になるための手段	<ul style="list-style-type: none"> ・やっぱりリハビリは、毎日運動する事と思う ・ずっとリハビリをしないと悪くなるばかりだから ・手術後のリハビリは体力が元気になる様と思う ・そうすればもう少しこらえようと思ってやっています（リハビリをすれば息が楽になってくると思ってやっています） ・もう一度カートに乗ってでもゴルフがしたい、それくらいの希望は持っているし、可能だろうという自信が生まれた
活動について	今の状態よりは良くなるという期待感	<ul style="list-style-type: none"> ・今一番体力が落ちているから酸素が必要で、それを乗り越えないといけないと思う ・（酸素が外れるのは）人より長くかかっても構わない ・日にちが薬、次第に良くなると思っている ・思っているほど楽になっているという気はないわ ・呼吸は確かに良くなっている ・（息は）少しこらえ良くなりました ・エレベーターを使わずに下りたり、上がったたりしています ・ずっと楽になるだろうという希望を持っている
手術について	達成感（手術を頑張った自分に満足している）	<ul style="list-style-type: none"> ・手術をして良かった、悪かったゆうのはまだ解からん、やらんほうが良かったとは思わんな、やっぱりやって良かったなあと思う ・日にちが経ってきたら、楽になったんかな、ようになったんかなという気がするのかなあ ・手術をしたら肩の荷が下りたという事じゃなあ、楽になった。手術前より、第一気分が朗らかになった ・目的を十分に達成したと思っている
	身体的苦痛	<ul style="list-style-type: none"> ・（手術直後息が出来なくなった事があって）あの世に言ったんじゃあないかと思ったくらい辛かった ・その時は手術をしたら楽になると思っていたけど、思った様にはいかなかった ・痛かったのがちょっと辛かった、一番印象深かった
将来について	ささやかな欲求	<ul style="list-style-type: none"> ・海外には行かないけど、元気に旅行にでも行きたい ・車でなく歩いて行きたい ・自転車にでも乗って、買い物に行きたい、途中で休みながらも行けたら最高じゃ ・苦しみをもって生きるより、元気になってしたい事が出来たらありがたいと思う ・田んぼに行くまでの坂道を上ったり、下りたり、そういった事が出来たらええと思っています ・もう一度働きたい ・早く元気で走ったり、飛んだり、跳ねたりもしたいです

(2) 日常生活活動について

病気の進行程度によりレベルの違いはあるが、皆《日常生活活動の制限》が生じていた。セルフケアについて、何もしない人が一人、最低限度のことはしようとする人が一人、休み休みならできるといふ人が四人いた。

(3) 手術について

現在の息苦しさがどうにかなるのではないかと、少しでも楽に過ごせるようになるのではないかと、という大きな《期待感》を持って手術に望んでいた。しかし、いざ手術になると医師にすべて《おまか

せ》、《いちかばちかの賭け》といった気持ちで望んでいた。手術をすることによって良くなるのではないかという期待感がある反面、手術に対しての《不安》も持っていた。

また、生命の危機感、身体的苦痛が手術を受ける強い動機づけとなっており、《回復に向けての欲求の高まり》が見受けられた。

2) 手術後

(1) リハビリについて

リハビリとは《呼吸が楽になるための手段》だと思っており、リハビリを続けることで、将来呼

吸や身体が楽になると考えていた。

(2) 活動の変化について

手術はしたが、自分が期待した程良くなっていない人が二人いた。手術をする前より呼吸は楽になっていると感じている人が三人いた。まだ酸素吸入が必要であったり、動くとき呼吸や身体がしんどかったりするが、《今の状態より良くなるという期待感》を持っていた。

(3) 受けた手術について

三人は手術をしたことについて後悔はしていなかった。手術を受けることは手術後の痛みや息苦しさ、体力の低下などの《身体的な苦痛》を伴っており、それは現在も残っていた。しかし、手術を頑張った自分には満足をしており、《達成感》を持っていた。

(4) 将来について

同じ年代の健康な人であれば、日常生活のなかで当然として持っている《ささやかな欲求》が将来像として示された。

考 察

1. 手術前について

分析の結果から、リハビリについては手術をするためにしないといけないものという《義務感》、頑張っていけば呼吸が楽になるという《期待感》、同じ病気の患者や、家族の《サポートが》、リハビリを行うことについては《不安》が導き出された。活動については《日常生活活動の制限》が、手術については呼吸が楽になるのではという《期待感》、医師に従うという《おまかせ》、《いちかばちかの賭け》、《不安》が、手術については手術に望む《回復に向けての欲求の高まり》が導き出された。

結果に示されたように、呼吸障害に伴って程度の差はあるが、何らかの《日常生活活動の制限》が生じている。これらのことは A. H. マズローが示す生理的欲求や安全の欲求という人間の基本的欲求の中でも、特に人間の生命を維持するために最も重要な欲求が満たされていない状態にあるといえる。

呼吸症状の悪化に伴い在宅酸素療法を余儀なく

されていく状況にある肺気腫患者にとって、呼吸困難感をもたらす日常生活の制限の苦痛は切実で、呼吸困難による身体的な苦痛や、酸素療法の使用や労作時の呼吸困難感による社会活動への参加が億劫になるための社会的な孤立感など計り知れないものがある^{4,5)}。それゆえに、手術をすれば楽になるという《期待感》や、手術に望む《回復に向けての欲求の高まり》は、最新の治療法である VRS へ、満たされていない生理的欲求や安全への欲求への充足を求めるものと思われる。

しかし、患者は手術がうまくいくことに対して《期待感》を持っている一方、手術に対する《不安》も持ち合わせていた。手術を受ける患者は誰しも手術そのものや手術の結果を想像しながら、手術前には様々な不安を体験するものである。岡谷は、手術前の患者は自己のコントロールの及ばない、あいまいで不確かな状況におかれ、「未知」への不安や自己絶滅の不安が強い⁶⁾と述べている。そのことと、最新の治療法である VRS が“情報の少ない未知の手術”であることを考え合わせると、患者が抱く不安は当然の反応であると思われる。そして《(従う) おまかせ》や《いちかばちかの賭け》といった、情動志向的対処形式をとっていた。患者は「連れがいたから、メンバーがいたから(リハビリが出来た)」、「やれるだけやってみて、駄目だったら帰ってきたらいいじゃあないかと、息子も言うしねえ」と同じ病気の仲間や、家族などの励ましを受けることによってリハビリを継続する意欲を高めていた。

上述した手術前の患者が示した反応の結果より、患者はリハビリを手術をするための義務として、あるいは呼吸が楽になるための期待で行っていることを理解し、その上でリハビリの結果を評価したり、励ましたりするなどのサポートを行うことが重要であると考えられる。また、患者が手術やリハビリへの不安を表出できるように場を考えた声かけや、患者の思いに傾聴すること、さらに、患者が不安を自己コントロールできるような対処に向けての看護援助が重要であると思われる。

2. 手術後について

リハビリについては将来《呼吸が楽になるため

の手段》が、活動については手術をしたから呼吸や身体が《今の状態よりは良くなるという期待感》が、手術については手術を乗り越えたという《達成感》と手術後の《身体的苦痛》が、将来については楽な呼吸だけではなく《ささやかな欲求》が導き出された。

患者は手術後の《身体的苦痛》を感じているにも関わらず、「リハビリをしないと悪くなるばかりだから」、「そうすればもう少しこらえ良くなると思ってやっています」といった思いでリハビリを行っており、リハビリは将来《呼吸が楽になるための手段》と考えていた。また、《今の状態よりは良くなるという期待感》を持っていることから、リハビリを意図的に行わせることになっていると考えられる。しかし、患者はリハビリには積極的に取り組むが、病棟における ADL の拡大をはかるための行動には消極的であった。看護婦は、患者が手術後呼吸も少しは楽になり、リハビリも頑張っているのであれば、リハビリにつながる ADL 拡大に向けての取り組みができるはずであると考えていたが、患者は理学療法室でのリハビリのみを重視しており ADL とは結び付いていないように思われた。このことは、理学療法室でのリハビリは、酸素飽和濃度や心拍数などの客観的指標がリハビリの結果として示されるために、患者自身が目標を立てやすいことが考えられる。しかし、ADL の結果は客観的指標として示されるわけでもなく、毎日生活する中で行う動作なので《呼吸が楽になるための手段》とは考えにくいからであると推察される。

肺気腫患者は手術後、「あの世に行ったんじゃないかと思ったくらい辛かった」と手術による苦痛や、「思ったようにはいかなかった」と期待していたほど呼吸が楽になっていないという《身体的苦痛》を感じている。しかし、「やらんほうが良かったとは思わない」、「目的を十分に達成したと思っている」と述べているように手術したことを後悔してはおらず、手術をがんばった自分に満足感や《達成感》を持っていた。このことは、肺気腫患者が持つ呼吸困難感、生命の危機感、活動の制限から解放されたいという生理的欲求、安全の欲

求が手術を受ける強い動機づけとなっていること、そして自分で手術を決意したことによるものであると思われる。

手術後、肺気腫患者は、「自転車で買い物に行きたい」、「田んぼに行くまで坂道を上がったり、降りたり出来たらありがたい」と述べており、それらは《ささやかな欲求》を示すものであった。この《ささやかな欲求》には、『(酸素や人の助けを)助けを借りずに自分の足で歩きたい』、『社会に参加したい』といった思いが示されたものと思われる。A. H. マズロー⁷⁾は、人間は自己実現のために自己成長し続ける欲求を持つ存在であることを示しているが、手術後に生じた患者の欲求は、健康な時には何ら困難を伴わない日常生活を求めるささやかな欲求であった。

上述した手術後の患者の反応の結果から、病棟における日常生活の動作がリハビリにつながることを患者が納得して、ADL の拡大をはかれるように援助することが必要であると思われる。また、手術を乗り越えたという達成感をバネにして、ささやかな欲求の実現に向けて、患者が積極的にリハビリに取り組んで行けるような援助が重要であると考えられる。

結 論

本研究より、VRS を受ける肺気腫患者の手術前後に示す患者の反応として、手術前においては、リハビリは手術をするためにしないといけないものという《義務感》、頑張れば呼吸が楽になるという《期待感》、同じ病気の患者や、家族の《サポート》、リハビリを行うことへの《不安》が、活動では《日常生活活動の制限》が、手術では呼吸が楽になるのではという《期待感》、医師に従うという《おまかせ》、《いちかばちかの賭け》、《不安》、手術に望む《回復に向けての欲求の高まり》が明らかになった。

手術後においては、リハビリでは将来《呼吸が楽になるための手段》が、活動では呼吸や身体が《今の状態よりは良くなるという期待感》が、手術では手術を乗り越えたという《達成感》と手術後の《身体的苦痛》が、将来については楽な呼吸

だけではなく《ささやかな欲求》が明らかになった。

さらに事例を積み重ねることによって、その研究結果の信頼性を高めていくことが必要であろう。そして、それらの結果を基に看護の視点を明らかにし、患者が主体的に自分の問題に取り組んで行くことができるような看護援助を検討することが今後の課題である。

文 献

- 1) 清水信義, 伊達洋至編著: 肺気腫患者の外科治療, 金芳堂, 43, 1997.
- 2) 高橋美津子: 在宅酸素療法中の患者のセルフケア確立への援助, 臨床看護 20(4) 471-475, 1994.
- 3) 土居洋子, 小山内幸子, 木村留美子, 久米田鶴子, 岩田和子: 慢性呼吸不全患者の看護に関する研究(1)酸素療法を受けている入院患者11人の日常生活動作と生活意識, 大阪府立看護短大紀要 5(1) 51-1, 1983.
- 4) 土居洋子: 慢性呼吸不全患者の日常生活動作とその関連要因, 臨床看護研究の進歩 3: 30-45, 1991.
- 5) 曾我久子, 大磯真主美: 呼吸不全による危機的状況にある患者の看護, 大阪府立看護短大紀要 11(1) 21-25, 1989.
- 6) 岡谷恵子: 手術を受ける患者の術前術後のコーピングの分析, 看護研究 21: 53-60, 1988.
- 7) A. H. マズロー (小口忠彦訳): 人間性の心理学 モチベーションとパーソナリティ, 産能大学出版部刊, 71-72, 1996.

(Original)

Reactions of pulmonary emphysema patients before and after VRS — Focusing on the rehabilitation, activity, surgery —

Shoko KATO, Shigeko YUBA, Reiko FUJII, Satoko TATSUGAMI,
Miki TAKEMASU, Naho KOSO, Yuko HAYASHI¹⁾

Abstract

Pulmonary emphysema has been mainly treated with medicine, but recently VRS(volume reduction surgery) has been receiving much attention. In nursing care for VRS patients, it is important to help the patient improve his/her daily activities and recover physical function smoothly after surgery. The purpose of this study is to clarify the reactions of pulmonary emphysema patients before and after VRS for appropriate nursing. The subjects were eight pulmonary emphysema patients at a ward in Okayama University Hospital, but six of them completed both before and after VRS data collection. The data were collected by interview and observation, and from medical and nursing records. Contents of the interview included rehabilitation, daily activities, respiratory symptoms, operative stress, and so on. The results were as follows : <A sense of duty>, <a hope of improvement on breathing>, <support>, and <anxiety> on rehabilitation, <limit of activity> on activity, <a hope of improvement on breathing>, <leaving everything to doctor>, <gambling>, <anxiety>, and <rising desire for recovery> on surgery were extracted as pre-operative patients's reactions. <A means of improvement on breathing> on rehabilitation, <a hope of getting better conditons> on activity, <a sense of achivement> and <pain> on surgery, <a tiny desire> on future were extracted as post-operative patients's reactions.

Key words : pulmonary emphysema patients, VRS(volume reduction surgery),
reactions of pulmonary emphysema patients

Okayama University Hospital Attached to Medical School
1) School of Health Sciences, Okayama University